

第32回 通常総会ならびに、昼食懇親会を開催



懇親会冒頭、挨拶をする、島海理事長

協同組合日本タイヤリサイクル協会（JSRA）は、5月24日、東京都千代田区の松本楼で、第32回通常総会を開催した。

総会終了後、会場で、関係機関、賛助会員、メディアを交えて、昼食懇親会を開催した。

懇親会冒頭、JSRAの島海重利理事長（株式会社トリウミ代表取締役）は「本日、無事に、第32回通常総会が終了した。我々を取り巻く環境は、コロナ禍以前に戻りつつあり、これからも、廃タイヤの中間処理業者として、適正処理を厳守し、適正価格を維持、タイヤ業界との協調に注力し、活動したい」と挨拶をした。

続いて、来賓代表として、一般社団法人日本自動車タイヤ協会（JATMA）の倉田健児専務理事が挨拶に



来賓挨拶をする、JATMA、倉田専務理事

立った。倉田専務理事は、大要、次のように挨拶をした。

「この4月に、JATMAが、タイヤのリサイクル状況を発表した。従来と発表内容が変わった事項がある。昨年までは、リサイクル率を出していたが、今回から、有効利用率という事項に変更した。変更に至った背景として、従来のリサイクル率というのは、発生した廃タイヤを分母に、処理した廃タイヤを分子として率を算出していた。そもそも、タイヤリサイクル率の公式統計はないので、JATMAの推定であった。ところが、コロナ禍に、この計算をすると、前年対比で、約5%下がってしまったのである。年間、100万トンの廃タイヤ量からすると、5万トンになってしまふ。この量は、北海道で発生する、年間廃タイヤ量と同等の数字になってくる。その5万トンはどこに行ったのだろうという事になる。この計算は、リアルな数ではなく、分子と分母を違う統計資料から引用する事で発生していた数字である事がわかった。

私の感覚だと、皆様のご協力ご尽力もあり、熱回収を含め、タイヤリサイクルは、100%に近い数字になると思う。

今、国際的にも様々な議論があり、タイヤリサイクルというのは、とても注目を浴びている事業である。数年前に施行された法規において、タイヤの熱回収は含まれていなかったが、リアルな世界で見ても、エネルギーバランスという観点から見ても、熱回収は、環境にも良い事であると思っている。

こういった、様々な議論がある中で、今回、有効利用率として、分母分子を同じデータから引用し、廃タイヤは、98%99%、有効に活用されているという事が明らかになった。さらに、残りの、1%2%も、投資されているのではなく、埋め立て利用等に利用されているのである。これは、皆様方の活動を通して実現できている、タイヤリサイクル状況だと思っている。

今後、様々なリサイクルが注目されると思うので、よりリアルな世界に近いデータを用いて、発表の仕方を変更した。こういった状況をご理解頂き、多くの意見交換ができればと思う」

その後、乾杯が行われ、和やかな雰囲気の中、終宴した。